

## 瘤付土器の民族考古学的研究

-東北地方縄文時代後期後葉の土器編年と社会-

中門亮太

本論文は、縄文時代研究において最も基礎的な資料である土器を手がかりに、その土器をつくり、使用したヒトの動きや当時の社会の様相を探ることを目的としている。対象としたのは、東北地方の縄文時代後期後葉に展開する瘤付土器である。瘤付土器は、後続する晩期亀ヶ岡式と、関東地方の晩期安行式の共通の母体とされる土器で、縄文時代後期から晩期への変遷過程を辿る上で重要な土器群である。また、縄文時代中期までの土器型式の分布域を超えて、関西地方や中国地方まで広範囲の出土が確認されており、土器型式の流通における社会的様相の変化も窺われる。

本論文では、従来の考古学的手法である土器型式研究を軸に、筆者が継続して調査を行ってきたパプアニューギニアの土器づくり民族誌研究の知見を加味し、瘤付土器を民族考古学的に検討し、土器を通じてその背景にある縄文時代後期後葉の社会について論及した。

### 第 I 部 瘤付土器の編年研究

第 I 部では、研究の基礎として瘤付土器の編年を整理した。これまでの瘤付土器の編年研究は、層位的出土事例が多く確認された仙台湾周辺地域の 4 段階の変遷過程が主流となってきた。東北各地で瘤付土器の資料が増えるにつれ、仙台湾周辺地域とは別の地域性を有する土器群の存在も明らかとなっており、地域間比較のためにも東北各地域における瘤付土器の変遷過程を捉える必要があった。そのため、第 1 章から第 4 章では東北地方を東北北部、仙台湾周辺地域（東北中部太平洋側）、東北中部日本海側、東北南部の 4 地域に区分し、各地域における瘤付土器の変遷過程を明らかにし、第 5 章で各地域の変遷過程を比較・考察した。

瘤付土器第 I 段階では、東北中部以北で大波状口縁深鉢が主体的となる一方、東北南部では平縁深鉢が主体となる点が、大きな地域的差異と捉えられる。また、東北北部及び中部日本海側では、注口土器・壺形土器で大型化の傾向が見られるほか、鉢形注口土器や、内面に縄文を施す浅鉢を持つ点など、共通性が見られる。この時期は、各地域で未だ前段階の後期中葉の様相を持つ土器が残存しており、其々の伝統をもとに瘤付土器が成立していったと考えられる。

瘤付土器第 II 段階では、平縁で括れを有する深鉢 B 類が東北全体で主体的となる。仙台湾周辺地域では、階段状の入組文や弧線連結文がいち早く成立する一方で、東北北部では文様のバリエーションが非常に豊富になる。東北中部日本海側では北陸地方の影

響が、東北南部では関東の後期安行式との折衷的な土器が散見され、隣接地域との交流関係が窺える。

瘤付土器第Ⅲ段階では、刺突・刻目手法が広く見られるが、使用箇所や形態に地域差が見られる。文様においても、東北北部と東北中部以南では地域差が見られる。

瘤付土器第Ⅳ段階では、各種器形や文様において、東北一円で斉一的な様相を持つ土器群が展開する一方で、南北では在地的な特徴を持った土器群が共存する。

瘤付土器の変遷過程において、東北北部、中部日本海側、南部は、各段階で高い共通性を有していたり、隣接する地域との関係から地域色の強い土器群が展開したりしていたことが窺える。唯一、仙台湾周辺地域は、三方が瘤付土器の分布圏に接していたことから、瘤付土器の基本的な変遷を追うことができる。前半期は、後期中葉に各地域で展開した土器を受けついで地域性が豊かであった瘤付土器は、第Ⅲ段階において東北中部以南で器種構成や文様描出手法、文様モチーフに共通した要素が見られるようになる。第Ⅳ段階には東北全域で斉一的な様相に収斂していき、晩期亀ヶ岡式への下地ができていく。第Ⅳ段階における共通性の高い土器群は、仙台湾周辺地域における第Ⅲ段階からその成立過程を追うことができる。瘤付土器圏における母体的な土器群は仙台湾周辺地域で生み出され、それらが北部、日本海側、南部へ波及し、隣接地域との折衝の結果、地域性を持つ土器群が各地で展開したという流れを想定することができた。

## 第Ⅱ部 瘤付土器の地域性と社会

第Ⅱ部では、瘤付土器に見られる文様描出手法や、文様要素に注目し、縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての土器の変化について、地域間の影響関係や社会的背景を見出すことを目的とした。また、遠隔地から出土する瘤付土器や、瘤付土器型式圏における異系統土器の在り方を通して、瘤付土器の流通や遠隔地との交流について考察した。

第Ⅰ章では、瘤付土器に見られる刺突・刻目手法の検討を通して、瘤付土器づくりにおける集団的な纏まりを明らかにした。刺突・刻目手法は、瘤付土器第Ⅰ段階から見られる櫛歯状工具による条線手法を源泉として、東北中部以南を中心に成立・発展した。その後、刺突・刻目手法は、瘤付土器第Ⅲ段階に東北一円に広がるが、東北北部では棒状工具による刺突をⅠ文様帯・緩衝帯及び文様帯の横位区画に施すものが主で、Ⅱa文様帯の文様内は縄文が併用される。東北中部以南は、第Ⅳ段階で入組文を描く文様の幅が広くなることと連動し、棒状工具による刺突から篋状工具による刻目への変遷が捉えられる。東北北部でも瘤付土器第Ⅳ段階に階段状の入組文が見られるようになるが、刺突・刻目手法の使用がⅠ文様帯及び緩衝帯に限られていたため、文様の変化と連動することはなく、磨消縄文によるものが主体となる。東北北部では、篋状工具自体が身近な施文具ではなかったと考えられる。

刺突・刻目手法の地域性から、瘤付土器は第Ⅲ段階で東北北部、仙台湾周辺地域、東北中部日本海側及び東北南部という、3つの地域差が看取される。また、東北北部でも

太平洋側と日本海側とで更に小さな差異が存在すると考えられる。この刺突・刻目手法の地域差は、文様モチーフが東北全域で斉一的な様相となる瘤付土器第Ⅳ段階でも捉えることができ、地文の差あるいは施文具の差という点では、引き続き細かな地域社会が存在していた可能性が窺える。施文具の選択という点まで遡る差異とすれば、それは土器づくりにおける基礎的な技術体系の差異ということになり、当該期の土器づくりに関わる集団差として想定することができた。

第2章では、東北地方の縄文時代後晩期を特徴付ける三叉文の成立・展開過程について考察を行った。三叉文は、瘤付土器第Ⅲ段階にその初現的な文様が確認され、施文原則として口縁部突起下に1つ、入組文の結節部を挟むように2個1対で配されるのが基本となる。そのような三叉文の施文原則は、東北中部以南を中心に整備され、瘤付土器第Ⅳ段階に東北全域へ広がっていく。東北北部では、瘤付土器第Ⅳ段階である程度完成した形で三叉文が広がるが、上述の施文原則から外れた用い方がされるものも見られる。東北北部と中部以南では、第Ⅳ段階においても地域性が看取されるため、土器づくりにおいても、当初は三叉文の施文原則を共有するまでの密な関わりはなかったと考えられる。しかし、晩期初頭には施文原則に則った三叉文の資料が増えていくことから、次第にヒトの移動を含め交流関係が密になっていったことが想定される。北陸地方や北関東では、瘤付土器第Ⅱ段階以降、東北中部以南との関わりが深く、東北的施文原則に則った三叉文が見られる。このような三叉文の在り方を見ると、ヒトの移動や技術的交流によって、土器に関する情報が共有されていた状況を窺うことができる。

一方、南関東の晩期初頭の三叉文は、単独で無文部に配されるものや、三叉文の一端が伸びるものが多く、やや異質な入り方をしていることが窺える。これは、ヒトの移動や技術的交流によるものではなく、モノの移動により生じたもので、三叉文の施文原則までは伝わらず、三叉文という要素のみが取り入れられたことによると考えられる。

三叉文の成立から展開の過程を見ると、当該期の土器をめぐる環境において、東北中部以南の土器群が東北北部や関東地方に強い影響力を持っていたことが窺える。南関東や北東北では、東北中部との交流において、三叉文の施文原則など土器づくりにおける情報は共有はされなかったものの、彼らが持つ三叉文という文様自体には強い興味を示し、ある種特別なものとして採用したと考えられる。これは、晩期前葉において、東北・関東それぞれで独自の入組三叉文が発達することからも想定される。

三叉文が展開する時期は、瘤付土器第Ⅳ段階から晩期初頭にかけて東北地方内における斉一性が高まっていく時期でもある。東北中部以南で成立した三叉文は、当初は東北北部に文様それ自体が要素として取り入れられたが、次第に施文原則等の土器に関する情報が共有されていく。その情報は北関東や北陸地方にも及んでおり、東北中部以南が瘤付土器の変遷・展開過程に強い影響力を持っていた可能性が見出された。

第3章では、遠隔地から出土する瘤付土器と、東北地方で出土する異系統土器を手がかりに、瘤付土器の分布と流通について考察を行った。瘤付土器の流通は、瘤付土器第

Ⅱ段階までは北陸地方や北関東など隣接する地域が中心であったが、第Ⅲ段階で関西地方、第Ⅳ段階になると中国地方にまで及び、徐々にその流通範囲を拡大していった様相が捉えられる。第Ⅱ段階では、注口土器に出土が偏っており、中でも遠方で出土するのは、特殊な形態の微隆起線文注口土器が多く、日常的な交易というよりは、儀礼等特別な背景により瘤付土器が求められた可能性を窺わせる。

瘤付土器第Ⅲ段階では、刺突・刻目手法を持つ土器が遠隔地に分布するが、その様相から東北中部以南の影響が看取される。三重県森添遺跡では、当該期の資料がかなり纏まって出土しており、在地的な器形にも刺突・刻目手法や、三叉状の陰刻が付されるものが見られることから、婚姻或いは親族組織を通じた密なヒトの移動が想定された。

瘤付土器第Ⅳ段階では、東北地方で文様や器形が斉一的になる傾向と同じく、遠隔地でも階段状の入組文や、口縁部、入組文結節部の三叉文、高石野類型注口土器、高石野系広口壺などが流通する。滋賀県滋賀里遺跡では、安行2式との折衷的な土器が見られ、東北からの直接的なモノの異動ではなく、東北・関東両地域と関係を持つ人の関与が窺われる。一方で、島根県原田遺跡では、全体の様相は不明なものの、入組文があまり整っておらず、モノの移動や情報の伝達による模倣により生み出された可能性が高い。高石野類型注口土器、高石野系広口壺は、いずれの地域でも器形や文様が斉一的であり、東北地方からの直接的な搬入品である可能性が高い。そのため、瘤付土器第Ⅳ段階においても、このような特別な器種が求められる儀礼的な背景が関西地方まで広く存在していたと考えられる。

遠隔地における瘤付土器の出土からは、大きく分けて、儀礼を背景とした特殊な器形そのものの選択的な需要による流通と、瘤付土器圏からのヒトの移動を背景とした流通とがあったと指摘できる。また、瘤付土器の影響は強く、各地で模倣土器として受け入れられていった様相が捉えられた。

一方で、瘤付土器圏における他地域からの影響は、広範囲に及ぶものはあまり見られず、他の土器型式圏と隣接する東北北部と東南北部で局所的に見られる。北海道からの影響は東北北部でも特に青森県で見られ、精製土器のみならず粗製土器が一定量流通していることや、出土した黒曜石が北海道産のものが多数を占める分析結果などから、ヒトの移動を背景とした、緊密な交流関係が窺える。また、北海道では主に粗製土器に用いられるマクレを伴う刺突が精製土器に使用されるなど、両地域の土器の要素が入り交じった土器が散見される。

関東地方の後期安行式は、北は山形県、西は愛知県までに留まり、瘤付土器の広がりとは比べ狭い範囲となっている。東南北部では、曾谷式から安行3a式まで出土が見られ、特に安行1式期に多く見られる。当該期には、精製深鉢のみならず、粗製深鉢も出土しており、東北北部と北海道の関係に見られたような、社会的に密な交流による流通であったと考えられる。そのため、折衷土器も生み出されており、ヒトの移動や土器づくりの技術的交流も想定される。折衷土器は、安行系の要素が強く、後期安行式を担った人々

が、東北南部へ移動し、土器づくりに携わったと考えられる。しかし、瘤付土器の分布中心である仙台湾周辺地域への波及は認められず、土器型式の勢力としては瘤付土器が強く、その後半期から晩期亀ヶ岡式の分布圏拡大に繋がったと考えられる。

### 第Ⅲ部 土器づくり民族誌からの視点

第Ⅲ部では、これまで瘤付土器に見られた型式の地域性や、社会的背景を考える一助とすべく、筆者が継続してフィールドワークを行ってきた、パプアニューギニア・ミルンベイ州の土器づくり民族誌を取り上げた。各地域に見られる土器を、「考古学的民族誌」の視点から捉え、土器型式が成立する要因や、流通・分布をもたらす社会的背景について考察を行った。

第1章では、縄文社会研究における従来の研究をまとめ、縄文土器研究における民族考古学的視点の必要性を述べた。

第2章では、パプアニューギニア・ミルンベイ州マッシムに現存する土器づくり民族誌を取り上げ、各地で個別の土器型式が成立し、一定の分布域を持つに至る社会的背景について考察した。マッシムにおける土器づくり民族誌から捉えられる土器型式からは、成形・整形段階における工程差が、各地域における土器型式を成立させる上で非常に重要な要素であることが理解された。工程差は、土器に描かれる文様や装飾とは違い、実際にその土地の土器づくりに触れなければ認識できない差異であるため、結果として生じる器形的特徴に、土器製作者の系統性が反映される可能性が高いと考えられる。

第3章ではマッシムにおける社会組織や交易に関する民族誌データを取り上げ、各地域で成立した土器型式が他型式の分布域へ流通する社会的背景や、流通により生じる在地土器への影響、模倣土器の誕生について考察を行った。マッシムにおける土器型式の分布の背景には、血縁集団、クランを基盤とした親族組織、儀礼における親族組織の協力関係、製作技法、特別な儀礼食調理の存在など、様々な事象を窺うことができる。それらはいずれも同心円状の広がりではなく、別のものと重なったり、飛び越えたり、縦断したりと複雑な広がり方を見せる。

土器型式にかかる社会的背景の最小単位は、土器づくりの技術継承に関わる血縁関係である。母から娘へと受け継がれる技術は、母系制における土地利用や居住制度とも絡み、特定の土器づくり技術が特定の範囲内に広がる基礎となる。

本論で提示した各地の土器型式は、クランに基づく親族組織や、幾つかのクランによって構成される地域社会的な纏まりの広がりや深く関わるものである。親族組織の協力関係によって、土器に関する情報の共有が行われるほか、集団内で土器が流通する。結果として、クランを単位とした細別型式が点在する一方で、製作技術や器種組成の点では、クランの纏まりによって構成される地域内で大きな違いは無い。この土器の広がりや、一つの型式として捉えうる共通した特徴を有しており、考古学的に捉えうる土器型式に近いと思われる。

親族組織の広がりを通じて成立した土器型式は、交易によって隣接地域と接触する。しかし、交易を通じた土器の流通は、決して双方向的なあり方ではなく、各地における土器づくりの重要度により、土器の発信地域と受容地域の別がある。また、土器の受容地域でも、在地の土器を持つ地域と持たない地域では、受容する器種に差が生じると考えられる。土器型式の分布において、型式圏の境界となる地域では両型式の様相が同程度に混じり合うと単純に考えがちであるが、その境界を挟む両地域の土器を詳細に分析することが土器型式の流通の方向や、各地における土器の流通戦略を見出す上で重要と言える。儀礼食調理における特別器種の存在は、儀礼と土器の分布と言う視点のみならず、土器の流通の流れを探る上でも鍵となる資料と考えられる。

また、土器の発信地域は、土器づくりに特化した地域であることが多く、土器づくりは社会の中で非常に重要な産業として位置づけられている。そのような地域の製作工程に注目すると、乾燥を挟むことで、一つの土器が出来上がるまでに、複数の製作者が関わる可能性がある。土器製作技術は、基本的には母から娘へと受け継がれ、土器型式成立の基盤となる要素であるが、地域における土器の重要度や、他地域への流通戦略を探る上では、製作工程にまで目を向け、社会の中で土器づくりがどのように位置づけられているかを把握する必要がある。

## 終章 瘤付土器の民族考古学的研究

終章では、第Ⅲ部で得られた土器づくりに関する民族誌的知見を、第Ⅰ部・第Ⅱ部で考察した瘤付土器研究に還元し、民族考古学的視点から、瘤付土器を担った人々や当時の社会について論じた。

マッシュムで捉えられた土器型式の基盤となるクランに基づく親族組織は、瘤付土器では概ね東北地方の4地域区分に該当すると考えられるが、婚姻や交易、儀礼時の協力などによって、瘤付土器第Ⅱ段階における東北北部と東北中部日本海側や、瘤付土器第Ⅲ段階における東北中部日本海側と東北南部のように、広範な広がりとなる場合がある。一方で、クランに基づく親族集団の纏まりは、互いに交易におけるパートナーや外婚単位としての機能を有していたと考えられ、交易や婚姻関係によってお互いの土器が少なからず往来し、モザイク状に東北一円に分布することで、結果として瘤付土器という東北地方を特徴付ける土器群の成立に至ったと考えられる。

儀礼の広がりとしては、微隆起線文注口土器や、高石野類型注口土器、高石野系広口壺など、東北地方を超えて広く分布するものがあたる。特に、高石野類型注口土器と高石野系広口壺の広がり、東北地方における瘤付土器の斉一化と時期を同じくし、晩期亀ヶ岡式へ向けて、儀礼を通じて一つの纏まりとなっていく社会的な変化も読み取ることができる。

## まとめ

本論文では、瘤付土器を主な対象資料として、その背景にあるヒトや社会の様相を、土器づくり民族誌の視点も用いて探ってきた。結論として、瘤付土器期の社会は、親族組織を基盤とした部族社会が展開しており、中でも仙台湾周辺地域が強い影響力を持っていたことが捉えられた。瘤付土器を担った人々は、儀礼形態を背景として、親族組織の繋がりを駆使し、その分布を広範囲に広げている。広範囲に分布する土器は、前半期では微隆起線文注口土器や丹塗りの壺型土器・注口土器、後半期には高石野類型注口土器や高石野系広口壺など特殊な土器が多く、儀礼などで使用するために選択的に搬入された可能性が高い。遠方に運ばれる理由については、トーテミズムに基礎を置くクラン（氏族）社会の成立と関わっている可能性が指摘できる。また、他地域では在地的な器形に瘤付土器の文様や要素を取り入れた土器が出土しており、瘤付土器が他地域の土器づくりに強い影響を及ぼしていることが窺える。

そして、瘤付土器終末期には、婚姻や交易を通じた交流が東北内部で活発となり、東北一円を覆う大きな部族社会が形成されたと考えられる。この集団は、晩期亀ヶ岡式において更に強力な発信力を持った社会へ変化を遂げており、瘤付土器期の社会は、晩期亀ヶ岡式社会へ続く社会的基盤が用意された時期として位置づけられる。